

共同運営部門：〈周産期センター〉産科医療センター

—関係部署—

産婦人科

—概要—



2008年度より、市立貝塚病院産婦人科との集約化の結果、泉州広域母子医療センターとして再編され、当科は周産期センター産科医療センターとしての機能を担って15年目になる。

婦人科手術と悪性腫瘍の化学療法は市立貝塚病院にて産婦人科医が行い、当院では夜間休日の産婦人科一次・二次救急、分娩、母体搬送、産科手術を担当している。また、産科病棟(6階山側病棟)は2009年より完全母児同室を開始したが、2020年度から新型コロナウイルス対策として面会制限をかけざるを得なかった。

これにより以前にも増して小児科、内科、外科、救命救急センター等との緊密な連携のみならず泉州地域の産婦人科医院との病診連携も強め、ハイリスク妊娠の集学的管理や早産児の受け入れなどもしている。対外的には地域周産期センター及びOGCS(産婦人科相互援助システム)準基幹病院となり、母体の緊急搬送受け入れ数も毎年160件前後、産婦人科一次救急の受け入れは府下2位の実績がある。

外来診療体制は従前と変わらず、産科・婦人科ともに初診再診を受けることにしている。助産師外来は妊娠中や産後2週間健診を含め育児技術指導やメンタルヘルスチェックなどの助産師の特性を生かした外来づくりを行っている。また正常妊娠・正常分娩の方にも分娩・育児していただくため、助産師外来の拡充、4D超音波を導入している。更に、分娩後アイスクリームのサービス、産後食としてお祝い膳を用意している。2020年度より新たにコーヒーマーカーを導入し、産婦が好きな時に飲めるコーヒースerviceを追加した。また、貝塚市・泉佐野市・熊取町・田尻町・泉南市・阪南市・岬町の皆さんの分娩費用は市内扱いとしている。(詳しくはホームページ参照)

今後は全国的にも注目されているこのシステムを発展させ、広域に亘る中核病院としての役割を果たせるように間断なき努力をしていく所存である。



—実績—

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
分娩数(含死産)	807	845	624	640	666
多胎/早産 (25週 500g以上 OK)	14/139	19/92	21/86	12/88	19/62
帝王切開	181	201	177	129	166
時間外婦人科手術	44	36	28	39	39
その他の産科手術	5	4	6	9	8
合併症妊娠	471	511	317	345	367
母体搬送受け入れ	141	155	183	129	140
時間外救急	1,602	1,282	1,072	956	1,009
救命救急センター症例	19	21	13	44	28
新型コロナウイルス感染 妊婦応需数	-	-	16	79	87

—今年度の成果と反省点—

今年度も産婦人科一次救急(府下2位)の受け入れ、二次救急(府下6位)、三次救急(府下1位)の母体搬送受け入れ、また新型コロナウイルス感染妊婦はパンデミック以来182例を受け入れ周産期中核病院としての成果を挙げた。新型コロナウイルスの影響で分娩数は依然減少しているがハイリスク妊婦は76%に達し、地域の周産期高次医療施設として機能している。

「りんくう発」としては泉州救命救急センターと協働で立ち上げた周産期蘇生二次コース「PC³」(ピーシーキューブ)の受講生が1,000名を超え、全国規模となっている。今後も継続して安全への取り組みに邁進する。

—来年度への抱負—

ローリスク分娩数の確保は周産期センター維持のためには極めて重要であるだけに、分娩数の増加についての更なる方策を講じたい。それには何より分娩の集約化・重点化とともに妊婦検診を近隣で受けられるスキーム作りの重要性について発信を続けていく予定である。

また、先述のPC³や新生児蘇生コース(NCPR)、学会認定の妊産婦蘇生コース(JMELS:京都プロトコル)などのセミナー教育を通じて地域の周産期医療レベルの向上に寄与していきたい。

